

日本における Not Religious But Spiritual (NRBS) に関する サーベイ—日本語文献を中心として—

湯川洋久

A Review of Not Religious But Spiritual (NRBS) in Japan

Hirohisa YUKAWA

1. はじめに

本稿の目的は、日本における Not Religious But Spiritual (以下 NRBS) に関する日本語文献を概観することにある。

日本に於いてスピリチュアルと題された書籍は数多く存在している。書店に行けば、「精神世界」と題されたコーナーにスピリチュアル関係の書籍が数多く並んでいる。比較的気軽に読めるタイプの文字フォントや色柄、表紙で、一般読者にも親しみやすいものとなっている。確かにそのため多くは一般読者向けであって、理論的立場を明確にするものは少ない。他方、従来の宗教のコーナーの中にも精神性、霊性、などの言葉で題された書籍も存在する。こちらも、一般の書籍と同様の装丁であることが多く、言葉の持つ響きほど近寄りがたい雰囲気醸し出していることはない。これらを概観してみると、大きくいくつかの流れがあるのを理解することができる。以下本稿ではこれらの書籍をいくつかの流れに絞って概観したい。

NRBS とは、形式的定義に従えば、宗教に関する調査において「自分は宗教的ではないが、スピリチュアルなことには関心がある」と自らを定義する人間のことを指す。即ち、特定の宗教を信じたり特定の宗教団体に属したりするものではないが、スピリチュアルなものごと（霊性に関する、神秘的な、精神世界に関するものごと）には関心を持っている人のこと¹を指す。より実質的にその内容を最大公約数的に取り出すとしたものとして（1）通常は知覚しえないが内面的に感じられるものへの信念と、（2）それを心身全体で感じ取ろうとする実践の総体であり、そこに（3）個人主義/私生活主義や反権威主義といった態度、（4）宗教文化的資源の選択的摂取といった特徴が、程度の差はあれともなうもの、とされよう²。

この概念が注目されるようになったのは、宗教社会学において世俗化現象が論じられるようになったが、その世俗化現象が実際には当初思われたほど現実化しなかったこと、に端を発する。現代科学の進展、工業化など近代化によって、宗教が社会に影響を及ぼす程度は次第に縮小していく、ひいては宗教の役割は全くなくなると第二次大戦後から 1960 年代まで盛んに論じられた。この議論を世俗化論と呼ぶ³。これは、科学に対する無垢な信頼から、科学及び科学的思考が全てを解決することができるとの希望的観測が、科学では扱わないないし科学では扱うことのできない分野である宗教については衰退すると思われたことにある。

しかしながら実際には宗教そのものは衰退せず、衰退したのは制度的な宗教に過ぎなかった、そして宗教は「私事化」されるに至ったと論じられるのが主である。この現象をトーマス・ルッ

¹ 有元裕美子「スピリチュアル市場の研究」 pp.2

² 堀江宗正「若者の気分—スピリチュアリティのゆくえ—」 pp.4

³ 島蘭進「現代宗教とスピリチュアリティ」 pp.10

クマンが「見えない宗教」において論じている。そしてこれが NRBS の出現の理由となるのである。

また、日本においては、このような私事化の過程が欧米と異なる可能性がある」と論じている。そこでまずこの書籍について概略の説明を行う。

2. トーマス・ルックマン「見えない宗教」(1976) ("The Invisible Religion" 1967)

ルックマンはまず、従来の宗教社会学研究が、教会と宗教を同一視し、分析の対象を組織化ないし制度化された場合に限定している点を批判し⁴、分析対象を個人にまで拡張する。即ち、人間が自己と世界とを結びつける「世界観」を本質的に必要とすることから解きほぐし、まず個人から見る宗教現象から遡って宗教を説明し、制度的に特殊化された宗教の衰退と宗教の私事性について論じる。

ルックマンは、宗教現象とは「有機体としての人間の生物学的性質の超越」⁵のことであると、かかる超越を実現する具体的過程として、「社会化」、即ち「歴史的社会的秩序が生み出す意味形態」であり「普遍的非特殊な宗教の社会的形態」⁶である「世界観」の内面化によって肉付けされること、が起きるとする⁷。

しかし「世界観」は「宗教の原初的な社会形態」に過ぎず⁸、「包括的な意味体系として、さまざまなレベルの一般性に関する類型や解釈図式あるいは行動様式を内包している。」⁹例えば低次のものとしては、「西風が吹くと雨が降る」「生肉は食べるな」と言ったものであり、これは世界観の中の単一の要素だけを取り上げたものに過ぎず「宗教的」と呼ぶには当たらないが、「世界観の意味を下層から上層へと上昇するにつれ当然のこととして受け入れられているみなれた多彩な具体的事象が影をひそめ、一般性を帯びた義務的モデルが姿を現す。」¹⁰このような、日常的世界から聖なる世界(=聖なるコスモス)への「複合的な意味の序列」が「世界観」の構造的な特徴の一つである¹¹。

そして、聖なるコスモスを明確な教理によって標準化し、宗教的役割を分化して専門とし、教理・儀礼の遵奉・管轄」を特定の管理者に委任し、“教會的”タイプの組織を形成する、という、「宗教の社会的形態としての制度的特殊化」¹²が行われる。

そしてそのうちの一般性を帯びた義務的モデルが“公式”モデルとなってゆく。しかし、公式モデルは例えば親から子へと伝承される間に継続が途切れることもある。また現代社会においては多種多様な第二次的制度(例えば新聞・雑誌に組織的に供給される相談欄、大衆心理に関するリーダース・ダイジェストの取り扱い、歌謡曲の歌詞等々)¹³が「生き方や社会的伝統など“究極的”意味世界との間の橋渡しをする」¹⁴。そのため、個人と“公式モデル”には齟齬を生じ、

⁴ T.ルックマン「見えない宗教」(1976)pp.32

⁵ Ibid. pp.73 他

⁶ Ibid. pp.117

⁷ Ibid. pp.78

⁸ Ibid. pp.83

⁹ Ibid. pp.84

¹⁰ Ibid. pp.86

¹¹ Ibid. pp.87

¹² Ibid. pp.100

¹³ Ibid. pp.154

¹⁴ Ibid. pp.88

その亀裂を埋めることが出来なくなってしまう¹⁵。かくして、「宗教の制度的特殊化は他の制度的領域の特殊化と並んで、宗教を“主観的”・“私的”実在へと変えてゆく」¹⁶。

かようにして、「キリスト教の伝統的形態の衰退は、単純に世俗主義者のイデオロギーや無神論、あるいは新しい異教などに帰するわけにはゆか」ず「現代の教会宗教が社会の周辺に追いやられ、“内的世俗化”をこうむったのは、あくまで複合的な過程の一つの側面としてである」¹⁷、と論じられる。

そして「ひとたび宗教は“私の事柄”であるということになれば、個人は“究極的“意味の組み合わせの中から、自分に似合ったものを選ぶようになる」¹⁸。

かようにして、私事化された宗教を持つ人のことを NRBS として考えてよいものと思われる。

もともと、このルックマンの提示した個人化過程の理論は、そのまま日本にも当てはまるかについては熟考せねばならない。ルックマン「見えない宗教」日本語版の後ろに、ヤン・スィングドーが「ルックマンにおける宗教社会学の基本構造」と題して、彼の理論が日本にも当てはまるか論じられている。

彼によれば、キリスト教は制度化された宗教でもあり、同時に高度に分化された宗教でもある¹⁹が、日本の神道は、一般社会からさほど分化していない文化宗教でありながらある程度制度化されていると論ずる²⁰。そのため、宗教の制度的特殊化に関する「スキームをそのまま日本の宗教の研究に受け入れるわけにはいかない」²¹と論じる。また、ルックマンは分化過程を個人化としているが、日本では欧米キリスト教は個人主義の宗教とみなされており、その発想が誤りの可能性がある、またはそのみなしがもし正しいのならば、むしろルックマンの主張が少なくとも東洋においてはさほど根本的ではないと論じる²²。

3. 島田裕巳「日本人の信仰」(2017)

ルックマンにおける日本での適用可能性に関する位置づけとしては不明確ではあるものの、日本人の信仰について論じたものがある。島田裕巳「日本人の信仰」(2017)である。日本人の信仰態度、言い換えれば日本人の NRBS についての説明として理解しやすいと考えるので、次はこれについて概説する。

島田(2017)によると、日本人は自らを無宗教と定義づけるのみならず、宗教に対していい加減とも考えている²³。実際、2003年国学院大学「日本人の宗教意識・神観に関する世論調査」では、何か信仰とか信心を持っているかについて「持っていない」と答えた人が70.9%もの高きにわたった²⁴。2008年読売新聞「宗教観についての世論調査」においても、「何か宗教を信じているか」について、「信じていない」と答えた人が71.9%だった²⁵。

しかしながら他方で、NHK 放送文化研究所「日本人の意識」調査によると、何らかの宗教的

¹⁵ Ibid. pp.121,122

¹⁶ Ibid. pp.129

¹⁷ Ibid. pp.135

¹⁸ Ibid. pp.147

¹⁹ Ibid. pp.196

²⁰ Ibid. pp.196

²¹ Ibid. pp.197

²² Ibid. pp.197

²³ 島田裕巳「日本人の信仰」(2017) pp. 18~22

²⁴ Ibid. pp.48

²⁵ Ibid. pp.48

行動をしている人は、2013年時点で92.5%にもものぼっており、1973年には「何もしていない」が15.4%から2013年には7.5%に半減している²⁶。この数字を押し上げているのは「年に1, 2回程度は墓参りをしている」への回答である。40年間の間に、62%から72%へ10%も増加している²⁷。またあの世・来世を信じている人の割合も、1973年の6.6%から2013年の13.4%へと倍増している²⁸。このように、宗教的行動を行う人の割合は多く、しかもより増加している。また、ISSP国際比較調査(宗教)では、初詣に行くかどうかも聞いているが、1998年の調査では「よくする」が56%、「したことがある」が37.4%、「しない」はわずか6.5%にとどまる。2008年調査では、「よくする」が54.9%で「したことがある」が36.7%、「しない」も7%と低い数字にとどまる²⁹。これらのことからすると、日本人は「無宗教である」とは簡単に結論付けることはできないのではないかと、むしろ「宗教活動の背後には、信心や信仰があるわけで、宗教活動に熱心だということは、日本人が決して無宗教ではないことを意味している」³⁰と島田(2017)は論じる。

ではなぜ日本人はそれでも自分たちのことを無宗教と言うのか。島田(2017)は、この理由を「信仰対象としての宗教という言葉が使われるようになることで、一人の人間にとって、信仰すべきは一つであるべきだという考え方が強くなった。宗教を信じるということは、その宗教だけを選び、その宗教が説く究極の教えを実践することだと考えられるようになった」³¹。しかるに日本人の信仰の仕方は、神仏習合にあるように、まず土着の神道が存在し、それに仏教が共存したため、複数の宗教を信仰することになった。しかも神道は創唱者の説いた教えも教典もないさらには救いもない³²。「近代国家建設を目指し、文化の手本とした西欧における宗教のありかたからすると」「一つの宗教を信じるのが正しい信仰の在り方であり、日本人もそうでなければならぬという感覚が広がったのである³³」、そこで日本人は自らを「無宗教」と称するようになった、というのである。

かようにして、島田(2017)の立場からも、多くの日本人は自らをNRBSと称することが可能であろう。

4. 島蘭進「スピリチュアリティの興隆」(2007)

島蘭(2007)は、スピリチュアリティを「従来のスピリチュアリティ」と「新しいスピリチュアリティ」とに分けて説明し、前者を「特定宗教の枠内で一定の規範にのっとって経験され、生きられるものであった」³⁴とし、後者を「1960年代のアメリカで、また70年代の先進諸国で、とりあえず既存の宗教伝統や教団組織と対立するような、まとまりをもった現象」であり、「欧米ではニューエイジとよばれ、日本では精神世界という呼称でよばれたものが、そのかなりの部分を占める」³⁵とする。そして、後者を「新霊性文化」と呼ぶ³⁶。さらに従来のスピリチュアリティ

²⁶ Ibid. pp.53

²⁷ Ibid. pp.54

²⁸ Ibid. pp.54

²⁹ Ibid. pp.66

³⁰ Ibid. pp.73

³¹ Ibid. pp.77

³² Ibid. pp.87

³³ Ibid. pp.78

³⁴ 島蘭進「スピリチュアリティの興隆」 pp.v

³⁵ Ibid. pp.v

³⁶ Ibid. pp.48

ィについては、新靈性文化の一部をなすものではなく、「その周辺に位置していると解するのが妥当」³⁷とする。

5. 鈴木大拙「日本的靈性」(初版 1944)

これに対し鈴木(1944)は、「靈性」=スピリチュアリティを「宗教」の根幹に据えて論じている。すなわち鈴木(1944)によると、「日本的靈性」というものは浄土系思想と禅とにおいてもっとも純粹な姿で現出しているとされている³⁸。そして靈性というものの性質は、「心の底の底から感じられるものでないといけない。靈性そのもののおのきでなくてはなら」³⁹ない、としているのである。このためには、「靈性の動きは現世の事相に対しての深い反省から始まる。この反省は遂には因果の世界から離脱して永遠常住のものを攫みたいという願いに進む。業の重圧なるものを感じて、これから遁れたいとの願いに昂まる。これが自分の力では出来ぬということになると、何が何でも、それに頓着なしに、自分を業縁または因果の繫縛から話してくれる絶対の大悲者を求めることになる⁴⁰」。さらに、靈性そのものに突き当たらない限り、根なし草のような個己の生活をしているのに過ぎず、「個己の根底にある超個の人にお目通りが済んでいない⁴¹」とする。そして、親鸞聖人を日本的靈性に目覚めた最初の人であると論じた⁴²。

以上の四本の著作の NRBS の本質の捉え方について比較してみると、ルックマン (1976) は「現代の教会宗教が社会の周辺に追いやられ、“内的世俗化”をこうむったのは、あくまで複合的な過程の一つの側面としてである」⁴³とし、NRBS の出現を不可避的な「プロセス」の結果ととらえている。これに対し島田 (2017) は、現代日本人が自らを無宗教ととらえているのを、日本人がキリスト教と比較して仏教・神道にかかわってきた経緯から、むしろ本質的なものととらえている。島田 (2007) は「古いスピリチュアリティ」が既存宗教の枠内で考慮されるものであるのに対し、「新しいスピリチュアリティ」と分類整理し、後者に属するものとして NRBS の状況を説明している。これに対して鈴木(1972)は、日本的靈性というものを日本の既存宗教の中に求め、高い靈性をそれらの宗教人の中に求めるため、いわば “Religious AND Spiritual” ということになり、NRBS については考慮されていない。鈴木(1944)にいう「日本的靈性」は、かなり深いレベルのものを指していると考えられる。

これらの比較から鑑みるに、スピリチュアリティは、既存宗教との比較で論じなければその輪郭は浮き上がってこないのではないかと思われる。

次に、スピリチュアルなことに興味を持ち救いを求める一般人に向けて書かれた書籍をランダムに選び検討する。

6. 小林正観「究極の損得勘定 Part2」(2005)

日本における NRBS に関して、多くの日本人に受け入れやすい言葉で一般向けに書いたものとして、小林正観の著作がある。この著者の NRBS に関する書き方は特徴があるが、それゆえ日本

³⁷ Ibid. pp.vi

³⁸ 鈴木大拙「日本的靈性」(2010) 角川版 pp.34

³⁹ Ibid. pp.58

⁴⁰ Ibid. pp.106

⁴¹ Ibid. pp.108

⁴² Ibid. pp.126

⁴³ T.ルックマン「見えない宗教」(1976) pp.135

人の宗教とスピリチュアリティに関する観方に付いて参考になろう。その中で彼の「究極の損得勘定 Part2」(2005)が彼の理解するスピリチュアリティに関する論理を比較的明確に書いたものとして参考になる。小林(2005)によれば、彼は自らを「ガチガチの唯物論の立場」⁴⁴と一方で称しておきながら、そのすぐ後で「神・仏・守護霊・精霊が存在する」⁴⁵と論じている。さらに「ただ、神の存在を認めても、宗教に属するものではありません。私は宗教者ではないので、神にひれ伏す必要はなくて、神を『使いこなす』だけ」⁴⁶という立場を取っている。即ち神・仏・守護霊・精霊の存在を信じながら（この点で「唯物論者」であることと矛盾している）宗教には属しないと断言している点、典型的な NRBS である。そして、神を地球とか宇宙と読み換え、救いを求める読者に対して宇宙の法則を味方につける方法を教える、という論じ方をしている⁴⁷。具体的には、神が好む人間の行為として、掃除、笑い、感謝を挙げ、具体例とともに幸せが増えるノウハウを伝える。もっとも、宗教者ではないと自らを定義づけておきながら、例えば聖書の言葉を引用し自分なりに解釈することなどを行っており⁴⁸、既存宗教色を反映させている。最初に宗教者ではないと論じておきながら、宗教書を参考にする点、一般に受け入れられるであろうゆえこのような書き方をしていると思われるが、ここが正に彼の理解の特徴であると考えられる。

小林(2005)の論法は、既存宗教には属さないが、何らかのスピリチュアルな存在を信じる点で、既存宗教に従った行動を行うとは限らないものの、島田(2017)の路線である特定宗教には属さず無宗教と自らを称しそれでいて宗教的行為を行うという NRBS と同様なしその延長の立場であると言ってよいと考える。そしてそれに付け加えて、現代科学の理解の範疇を超える存在を信じるという「信仰」を意識的に取り入れて日々の生活の実践で幸せになる方法を説いている点、ルックマンの言う「聖なるコスモス」の次元に近い世界観で説明していると考えられる。

このように、「神・仏・宇宙の法則」などを用い、読者に幸せへのノウハウを教えるタイプの著者として知られた人は、他に江原啓之、斉藤一人、などがいる。

7. 矢作直樹「人は死なない」(2011)

東京大学教授の手によるスピリチュアリティに関する一般向け書籍である。そのためスピリチュアルな事柄に対して懐疑的な一般人に対しても受け入れられやすいメリットがある。

この書籍は著者の救急医療現場の描写に始まる。次に気功の経験に入り、ここから段々と現代科学では説明しがたい現象の存在を語りはじめ、これを一般的な理論で説明する。例えば時代によって変わる科学に関する真理、などである⁴⁹。次に、自分の中に他者が入り込むような体験、体外離脱体験、極限状態における謎の存在の出現、臨死体験、さらには著者自身の「声」の体験、著者自身の母親との交霊体験などが語られる。その後は欧米スピリチュアリズムの研究潮流、例えばエマニュエル・スウェーデンボルグなどを説明、ポルターガイスト現象⁵⁰に始まる交霊会を通じて死体が見つかるという事件から始まった近代スピリチュアリズム研究（英国心霊研究協会(SPR)、米国心霊研究協会(ASPR)など）の説明、シルバーバーチ霊、などを説明する。最後に、

⁴⁴ 小林正観「究極の損得勘定 Part2」(2005) pp.12

⁴⁵ Ibid. pp.12

⁴⁶ Ibid. pp.13

⁴⁷ Ibid. pp.15

⁴⁸ Ibid. pp.27, 33 など。

⁴⁹ 矢作直樹「人は死なない」(2011) pp.41

⁵⁰ 例えば家の中で家具が勝手に動いたり、大きな物音がしたりする現象

人間の智慧を超えた大いなる力（摂理）と生の連続性、そしてそれを認識した上で人はいかに生きるか、についてまとめる⁵¹。自身の経験はもとより科学的視点からの説明があることで説得力があり、従って一般人にも受け入れられやすいタイプの書籍であろう。

8. 有元裕美子「スピリチュアル市場の研究」(2011)

これはスピリチュアリズムに救いを求める一般人向けに書かれたというよりも、当時流行していたスピリチュアル・グッズが多く市場に流通している社会現象に関心を持つ一般人を読者対象とするものである。

有元(2011)は、「スピリチュアル（またはスピリチュアリティ）」を、「宗教や超自然現象に限定せず、目に見えず、測定も可視化もできないエネルギーや、それが引き起こす現象の総称」⁵²とする。そして、スピリチュアル・ビジネスを「現代科学では説明のできない超越的な作用による精神的満足を訴求するビジネス」⁵³と定義する。スピリチュアル・ビジネスの範囲には、「気功、レイキ（ヒーリングの一種）、スピリチュアル・ヒーリング等の施術や、占い等が含まれる。これらは、旅行やグルメ、鉄道、天文、アニメ等の趣味と表面的には何ら変わらないように見えるかもしれない」⁵⁴が、これらと異なるのは、スピリチュアル・ビジネスが「実体がなく、見えず、ふれられもしないスピリチュアリティ（霊性）を、程度の差こそあれ、信じていること」⁵⁵にあるとする。

なお、有元(2011)が挙げているスピリチュアル・ビジネスの種類としては、対面での占い・相談・鑑定、携帯サイト・ゲーム機器などでの占いゲーム、レイキ・オーラソーマ・催眠・ヒプノセラピーなどヒーリング・セラピー、ヨガ教室、気功・太極拳・古武術などの教室、占い・ヒーリング・瞑想、呼吸法などのスクール・教室、パワーストーン・カード・香りエッセンスなど、ヒーリングミュージック・瞑想用 CD・DVD、占い関連書籍（占星術・風水・運氣など）、お賽銭・お布施・寄進など、神社仏閣のおみくじ・お守り・数珠など、宗教法人が販売する印鑑・壺・絵画・食品など、パワースポット・ツアー（ヒーリング・癒し目的の旅）がある⁵⁶。

9. 考察と今後への課題

以上の著作を俯瞰するに、スピリチュアリティという用語を同じく用いても、鈴木大拙「日本的霊性」のように、既存宗教内において、しかもかなり深いレベルと思われるもののことを指して説明するものから、占い、ヒーリング等を通じて現世利益を求める気軽なものまで、幅広いレベルの内容が存在する。従って、NRBS という場合であっても、その内容は実は千差万別である。とするならば、NRBS は、サーベイ調査で一律、形式的に「宗教的ではないが、スピリチュアルなものには関心がある」と聞くだけではその現代におけるふくよかな内容を包括的にかつ分析的に捕捉することは困難なのではないかと考える。今後の研究を俟たねばならない。

参考文献

⁵¹ Ibid. pp.190

⁵² 有元裕美子「スピリチュアル市場の研究」2011 pp.2

⁵³ Ibid. pp.48

⁵⁴ Ibid. pp.34

⁵⁵ Ibid. pp.34

⁵⁶ Ibid. pp.54

有元裕美子「スピリチュアル市場の研究」(2011) 東洋経済新報社

小林正観「究極の損得勘定 Part2-1%の仲間たちへ」(笑顔と元気の玉手箱シリーズ 5) (2005)
宝来社

島菌進「現代宗教とスピリチュアリティ」(2012) 弘文堂

島菌進「スピリチュアリティの興隆」(2007) 岩波書店

島田裕巳「日本人の信仰」(2017) 扶桑社

鈴木大拙「日本的靈性」(完全版) (2010) 角川ソフィア文庫 (1944 初版 岩波書店)

矢作直樹「人は死なない」(2011) バジリコ株式会社

ルックマン・T 著、赤池憲昭・ヤン・スィングドー訳「見えない宗教—現代宗教社会学入門—」
(1976) ヨルダン社